

あり ち がた

「在千鴻」

なぐさ

在千鴻 あり慰めて 行かめども

家なる妹い いぶかしみせむ

卷十二—3161 作者 未詳

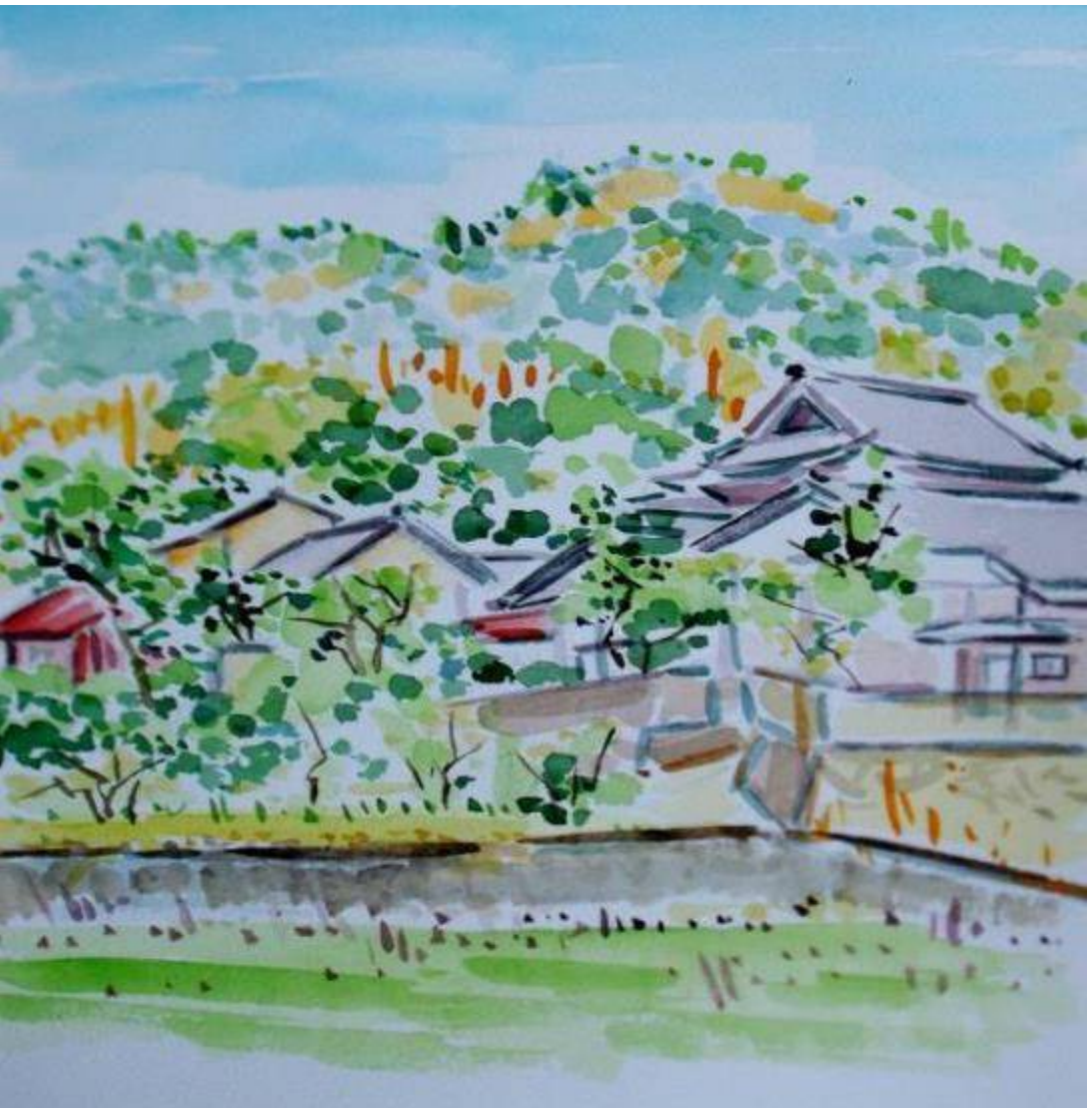
（解説）「在千鴻のこのすぐれた景色を眺めて、心を慰めながら行きたいと思うが家に留守居をしている妻がさびしがつて私の帰りを待ちわびていることであろう。」と、旅行中に家に居る妻を思つて、在千鴻のこんな素晴らしい景色もゆっくり眺めてはおられないという気持を詠んだものである。

・この歌に詠われている「在千鴻」だといわれている場所が全国にいくつかあるが、一説として福岡県福津市在自あらじが【筑前国続風土記】には「荒司村（現・在自）の北、津屋崎（在自の海岸側）の間は昔は鴻であった。これを【有（在）千鴻】という、近年田となる、その間に唐坊という宿場があった。上方かみがたへ行く大道があったという」と記されている。また、旧郡（村）名が掲載されている【和名抄】に福津市在自は、古代には荒自郷あらじのむらと呼ばれた所でこの部落の西部一帯はかつては入江であったことが記述されていることなどから、福津市はこの「在千鴻」の万葉歌碑の説明板には「在自参考地」と記している。

・在自あらじの所在する福津市は福岡県の北西部に位置し玄界灘を望む福岡市と北九州市の

中間部にあり東部を山、西部を海に囲まれた地にあるが特に海岸一帯と創建が約千六百年前と伝えられる福岡県内で有数の古社「宮地嶽神社」が南麓に鎮座する宮地岳とその北側に連なる「在自山」あらいやま等周辺の山林が、昭和三十一（一九五六）年に玄海国定公園に指定されるなど風光明媚な自然景観を形成している地である。

（写生地1）この万葉で詠われている「在千瀉」の推定地である福津市在自はJR鹿兒島本線「福岡駅」から北へ約3km離れた地にある「在自山（標高249m）」の西麓に約70戸の家屋と田畑が広がる、のどかな農村地帯である。在自集落の東にそびえる「在自山」と麓の集落を描く。（池田杏花）



・福津市教育委員会作成の古代の地形推定図には現在の玄界灘に面する海岸部より約3km内陸部に入った昔の荒自郷（現・在自）の一带に東南に向かって約6kmにわ

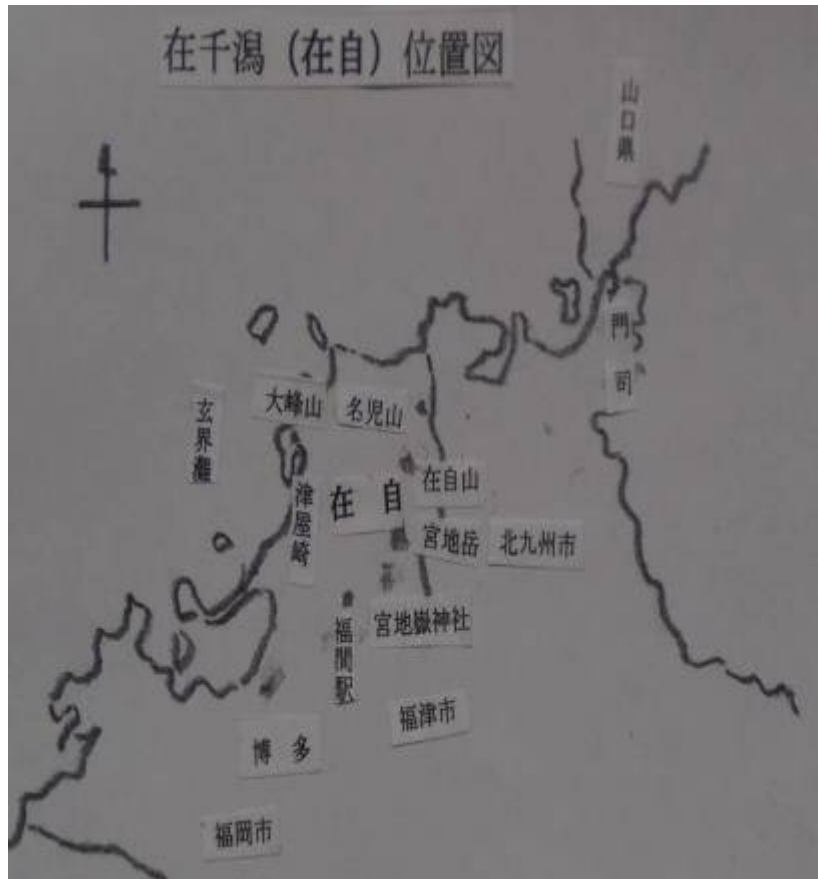
たり万葉集で詠われた「在千瀉」に推定されている大きな旧・入り海が描かれている。また、続風土記にある「唐坊の宿」と呼ばれる中国人の居住地が在自内に遺跡として残る。

・さらに「上方へ行く大道があったという」ことについては天平二（730）年大宰だざいの帥そち（大宰府長官）として九州・大宰府に赴任していた大伴旅人が大納言に任ぜられて京に帰ることになったが、家族やそば勤めの者たちは旅人とは別に、その年の十一月に一足先に大宰府から京へ向け出発した。一行が、この在自地区を過ぎた北東約4km先にある名児山（現・福津市勝浦）を越える時に、一行の中にいた旅人の妹で、旅人に従って九州にきていた女流万葉歌人・大伴坂上郎女が「名児山」「（巻六―963）」を詠んだ歌があることなどから、在自の近くには都と大宰府を結ぶ官道が通じていたようである。このことから一行もこの歌にある在千瀉の風光明媚な景色を見ながら名児山へ向かったものと想定される。

・なお、古くからこの地域一帯には多くの古墳があるとされており、今なお、以前の姿を残す古墳は60基ある貴重な古墳群で「津屋崎古墳群」と呼ばれる国指定史跡となっている。このように多くの古墳が分布していることから、この地方は古代には大変栄えていたことを物語っているところであると伝えられている。

（参考文献）滝口弘著「九州の万葉」福津市「津屋崎古墳群」「第日本地名辞書」など

（写生地2）宮地嶽神社が鎮座する宮地岳の北に隣接する在自山の西麓に「続風土記」に記される古代に「在千瀉」があったと推定される荒自集落と周囲に広がる田を描く。背景には福津市の西の端、玄界灘に面する渡半島にあり、山全体が玄界公園に指定されている「大峰山（標高114m）」を描く。（池田杏花）



【在千瀉推定(在自)位置図】

